

# 日本経済新聞

10月5日

水曜日

文化振興センター  
活動活動情報部  
東京都新宿区歌舞伎町2-45-5  
〒160-0021  
TEL. 03-3200-2118 FAX. 042-344-3399

## 文化

またことをすべて記録し、編集へ送り、監督の意図を作品に反映させるための仕事だ。セリフや衣装、持ち物に間違いや矛盾がないかを確認するなど様々な仕事があった。

10年の間に、吉村公三郎、久松静児、鈴木清順、山本薩夫らの監督と仕事をさせてもらった。彼らは神様みたいな存在。頭の中ですべてのカットが入っていて、ひとつひとつがテーマとつながっている。そんな監督が今どれくらいいるだろうか。

スクリーンライターを辞めたあと、こつこつと監督たちの素嗜らしさを伝えようと、1981年から1984年、監督と共に作品を見る「監名会」を始めた。しかし、参加者は中高年

が多い。子どもたちに映る「子どもシネマスクール」だ。私たちが昔一緒に仕事をしたスタッフに、子どもたちが助手としてついで、1つの作品を制作する。新人助手が体験の中で自然に覚えていった映画作りを实地に経験させている。

父のかかわりの中で、戦争体験を聞き、成長していく物語だ。毎回、撮影に入る前には2日間かけて、みっちり台本の読み合わせを行う。子どもたちが現場で何の担当につくかは事前には決まっていない。日によって照明につくこと

もあれば、撮影につくこともある。台本を10回、20回読み込むことで、どの役割になっても自然と体が動くようになる。子どもたちは1日プロ方々を覚えてしまおう。プロとして活躍していたスタッフも驚くほどだ。録音部の経験がない私は知らなかったが、集音マイクの傾け方一つとっても、人によってうまい下手があり、センスが必要だという。私自身も一緒に勉強させてもらっている。

撮影所時代の知り合いはほとんど亡くなっている。一緒に始めた木村さんは2010年に、高村さんは2005年に鬼籍に入られた。当時の映画作りを伝えていくための時間はそう長くない。

助成金を受け存続  
しかし、日本では映画教育のために十分な予算が投じられていないと感じている。子どもシネマスクールは国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」の助成を受けている。この基金の助成対象は映画だけではない。当法人への助成は1作につき、200万〜300万円程度で、有志がいなければ存続は厳しい。助成金を利用して5年間で完成した映画は年間有料で上映はできない。基金を募って自前で映画制作ができないか。子どもたちに映画を伝えながら、本格的な映画作りをする。それが、77歳になった私の夢だ。(たけした・もとこ NPO法人日本映画映像文化振興センター代表理事)

### 未来の映画監督は君だ

◇子どもシネマスクール 撮影所時代の作り方伝える◇

竹下 資子



子どもたちは助手として映画制作に参加する

目指すのは映画人としての基礎を身につけてもらうこと。だから、ワークショップのように、各自が自由に作品を作り、指導するという形式を取らなかった。集団で1つの作品を作る過程を体験してほしい。

小学校高学年20人程度が毎年参加する。撮影期間は1週間から10日で、40分前後の作品を仕上げ

監督や野村芳太郎監督の作品に出演した松竹のスター石濱朗さんに主演してもらった。監督は山本薩夫監督の助監督を務め、「マタギ」などを撮った後藤俊夫さんだ。3人の子どもたちが同居する祖

父のかかわりの中で、戦争体験を聞き、成長していく物語だ。毎回、撮影に入る前には2日間かけて、みっちり台本の読み合わせを行う。子どもたちが現場で何の担当につくかは事前には決まっていない。日によって照明につくこと

もあれば、撮影につくこともある。台本を10回、20回読み込むことで、どの役割になっても自然と体が動くようになる。子どもたちは1日プロ方々を覚えてしまおう。プロとして活躍していたスタッフも驚くほどだ。録音部の経験がない私は知らなかったが、集音マイクの傾け方一つとっても、人によってうまい下手があり、センスが必要だという。私自身も一緒に勉強させてもらっている。

撮影所時代の知り合いはほとんど亡くなっている。一緒に始めた木村さんは2010年に、高村さんは2005年に鬼籍に入られた。当時の映画作りを伝えていくための時間はそう長くない。

松竹、大映、東映、東宝、日活……。日本映画の全盛期、各社が多くの新入社員を採用し、撮影所の中で、長い時間をかけて一人前の映画人を育成していた。日本映画が隆盛期を過ぎると、そうしたシステムは崩壊してしまふ。私は子どもたちに撮影所時代の映画作りを伝えたいと、15年前から「子どもシネマスクール」を開催している。

基礎を身につける  
1965年からスクリーンライターとして映画制作に携わった。撮影現場で起



子どもたちは助手として映画制作に参加する

目指すのは映画人としての基礎を身につけてもらうこと。だから、ワークショップのように、各自が自由に作品を作り、指導するという形式を取らなかった。集団で1つの作品を作る過程を体験してほしい。

小学校高学年20人程度が毎年参加する。撮影期間は1週間から10日で、40分前後の作品を仕上げ

父のかかわりの中で、戦争体験を聞き、成長していく物語だ。毎回、撮影に入る前には2日間かけて、みっちり台本の読み合わせを行う。子どもたちが現場で何の担当につくかは事前には決まっていない。日によって照明につくこと

もあれば、撮影につくこともある。台本を10回、20回読み込むことで、どの役割になっても自然と体が動くようになる。子どもたちは1日プロ方々を覚えてしまおう。プロとして活躍していたスタッフも驚くほどだ。録音部の経験がない私は知らなかったが、集音マイクの傾け方一つとっても、人によってうまい下手があり、センスが必要だという。私自身も一緒に勉強させてもらっている。

撮影所時代の知り合いはほとんど亡くなっている。一緒に始めた木村さんは2010年に、高村さんは2005年に鬼籍に入られた。当時の映画作りを伝えていくための時間はそう長くない。